

地でこれらの薬剤によつてもなお殺貝されない宮入貝がある様である。これらの薬剤に対する先天性の低抗性について津田氏は室内実験により宮入貝は冬季には生物学的抵抗性が強度で、夏季には弱度であると述べている。しかし有病地に於ける春秋二期の数度の殺貝事業により宮入貝にも薬剤に対する獲得耐性が出来るのではないかと考え室内実験を試み、その結果を得たので報告する。

実験材料・実験方法・実験成績及び考按は省略。

結論 殺貝剤として用いられている Santobrite, DN-1 の水溶液を長期間に亙り、稀薄な薬液より逐次濃厚な薬液に作用せしめて、尚生存し得る宮入貝に吸収能耐性が出来る。

同一濃度の薬液を4週間（作用回数は1週間毎に4回）作用せしめて、尚生存し得る宮入貝にも吸収能耐性がみられる。

又、初めより濃厚な薬剤を作用せしめて、尚生存し得る宮入貝は、稀薄な薬液を作用せしめた場合よりも、より強い吸収能耐性を現わす。

尚組織耐性とみられるものはなかつた。

文献省略

（本論文の詳細は北関東医学雑誌第6巻第4号に掲載。）

## 7. Triostam (trivalent sodium antimony gluconate) による

### 日本住血吸虫症の治療について

大 田 秀 浄

日本住血吸虫症の治療に関しては現今、Stinbnal（三価酒石酸アンチモンソーダ）及び Fuadin, Stimon（三価アンチモン・ブレンツカテヒン・ジスルアオン酸ソーダ）が一般に使用されており、宮川、武藤、片田、五斗、Most et al. Alvin, J. B. Tillman. Billnigs, F. T. et al. Pesigan, T. P. et al. Harry most, 西村、岡部等の業績がある。その他本症の治療として吉田・森田の Antimon+(V)-Hexoat, 又最近西川は同剤の一種 Sodium oxyantimonic gluconate により実験を試みているが、各れも治療に長時日を要し、且つ副作用があり、農民を主とする日本住血吸虫症の治療に多くの障害を与えている。短期日に、且つ副作用のないことが本症の治療薬として望ましいのであるが、1944年 Goodwin, L. G. が Triostam (trivalent sodium antimony gluconate)

(30%trivalent antimonylを含む) (以下T. S. A. G. と省略) を 住血吸虫症に使用し、吐酒石の $\frac{1}{2}$ 、酒石酸アンチモンソーダより $\frac{1}{2}$ 毒性が少ないことを発見し、その後M. Evfan, S. Talaat により埃及住血吸虫症の 38kg~64kg の成人36例に T. S. A. G. 6%溶液当量約 3mg を静注し、30例に6日間、6例に12日間使用し、前者は T. S. A. G. 全量 0.72~1.08g にて22例(73%)が虫卵陰転、副作用として注射直后遅脈が少数例にあり、嘔吐が2例(4回~5回注射后) 蕁麻疹様発疹が1例(3回注射后)に現はれ、短期日に、副作用少く治療に成功したことを報告している。又 Rodrigues da Salva and Dias が Manson 住血吸虫症に当量 15mg 48時間間隔で突撃療法を試み、好結果を得たと報告している。

今回、英国の Burroughs Wellcome 会社より本剤の提供を受け、動物及び人体の本症の治療を試

みたので報告する。

## 実 験 方 法

動物実験は昭和29年3月より家兎15匹、及び山羊一頭に日本住血吸虫セルカリアを当疔100隻を感染せしめ、糞便中に日本住血吸虫卵の排泄を認めてより、又感染後数日にして T. S. A. G. を治療直前に滅菌蒸溜水にて6%溶液となし、体重により用量をきめ静脈注射を実施した。用量は当疔 8~30 mg を6回コースと12回コースを連日又は隔日に静注した。糞便中の虫卵検査方法は排卵開始日については感染後4週間目より連日、治療期間中も連日、治療終了後2週間は連日、以後は1週間おきに AMSIII 法により実施した。斃死又は剖検死後は解剖し、腸間膜静脈及び他の静脈中の虫体を精査し又肝臓及び門脈部は灌流法により虫体を精査して虫体の有無を調査した。組織学的には省略した。

人体実験は排卵中の本症の外来患者9~41才の14名につき、T. S. A. G. 6%溶液を当疔約2.8~5mg を初回のみは半量とし、6回連日、6回隔日、8回連日、9回連日、12回連日、12回隔日の静注を実施し、副作用を観察し、治療終了翌日と治療終了後1カ月、3ヶ月の3回に AMSIII 法により検便を実施した。

実験成績及び総括考按は省略。

## 結 語

1) Triostam による日本住血吸虫症の治療に当り、動物実験により日本住血吸虫セルカリア感染後3日目の幼若なる仔虫と日本住血吸虫成熟虫体に対して、共に T. S. A. G. 当疔 15mg を12回注射により効果が認められたが、当疔 10mg を6回、12回、15mg を6回注射にて、前者に効果は認められなかつた。後者には効果は認められた。

2) 人体実験により6回、8回、9回、12回連日注射の大人5例に毎回当疔 3~5mgにて3ヶ月後の検便は全例陰性の成績を得た。12回隔日注射の大人3例に毎回当疔 3~3.5mgにて3ヶ月後の検便は全例陰性の成績を得た。又12回隔日注射の小児5例に毎回当疔 3~3.7mgにて3ヶ月後の検便は全例陰性の成績を得た。6回隔日の大人1例に毎回当疔 3mg にのみ3ヶ月後の検便にて陽性であつた。

3) 人体実験による副作用は、大人は Stibnal, Fuadin と同様相当強度に認められたが、小児には殆んど認められなかつた。

4) 以上の成績により、Triostam は日本住血吸虫症にも短期日にて治療効果はあるものと認められるが、アンチモン剤特有の副作用が認められた。

## 文 献 省 略

(本論文の詳細は北関東医学雑誌第6巻第5号に掲載、尚本論文の要旨は第14回日本寄生虫学会日本支部大会、及び第24回日本寄生虫学会総会にて発表した。)

## 8. 寄生虫卵の各種集卵法についての研究

(特に日本住血吸虫卵のMIFCによる集卵法について)

大 田 秀 浄、佐 藤 重 房

日本住血吸虫(以下日虫と略す)病の確定的な診断は宿主の糞便中より本虫卵を検出する事が第一